

日本大学文理学部

史学科同窓会

# 會報

第四号 (通号八一)

平成三十二年三月三二日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二―二五―四〇

日本大学文理学部史学研究室内

FAX〇三五三二七一九二一八

## 史学科左見右見

### 〈当世大学生事情〉

学科主任 粕谷 元

一昔前、若者の主なコミュニケーションツールは携帯電話やメールでしたが、今ではすっかりLINEがそれらに取って代わりました。ご多分に漏れず私のゼミ生たちもゼミのLINEグループを作って、その中で連絡を取り合っているようです。「ようです」というのは、そもそもそのLINEグループに参加していない私は蚊帳の外に置かれているからですが、近頃これが少々不便になってきました。というのも、学生たちが昔ほどメールを利用しなくなったことで、ゼミ生に連絡メールを送ってもなかなか返信されないケースが増えてきたのです。そういったこともあって、ゼミ生全員に大事な連絡をメールで行うときには、メールの文末に「このメールを読んだ人は、速やかに仲間と「LINE」等で「連絡内容を共有するように」などと書き添えているのですが、よくよく考えれば面倒な話ではありません。私がゼミ生のLINEグループに参加すれば解決する

話なのかもしれませんが、「発表まじ無理」とか書かれているというゼミ生たちの「聖域」に侵入する気にはどうもなれません。

もつとも、ゼミ学生とのメールのやり取りも、なかなか一筋縄ではいきません。三年生になっても大学生としてのメールの基本的作法が身につけていない学生がいるからです。おそらく、メール作法について指導されたり、学んだりした経験がないのでしょう。ゼミの学生に就活などで失敗してほしくないのです、その結果、用件だけ書いて全く名乗らないメールに対しては、アドレスから送信者が仮に特定できたとしても、「あなたはどなたですか？」とあえて返信したり、敬語の使い方がまずい学生に対しては、返信メールあるいはゼミでそれを指摘したりすることになります。その一方で、ビジネスメールの作法を学んだのか、「いつもお世話になっております」という書き出しの丁寧すぎるメールを私に送る学生もいます。「平素は格別のご高配をたまわり、厚く御礼申し上げます」などよりは、まだいいと寛容すべきでしょうか。

「史学科左見右見」と題する本欄は、学科内の人間が史学科の最近の様子などを伝える欄として前々号の第二号(通号七九)から設けられたものです。二〇一八年度の史学科では、一昨年の七月に急逝された大塚英明先生の後任として平野卓治教授が着任し、大塚先生を引き継ぐ形で文化財ゼミナールや学芸員コース科目を担当されています。また、三十年もの長きにわたって日本近世史分野の専任教員として学生・院生の指導にあたられた上保國良先生が昨年三

月に定年退職し、後任として小川雄助教が着任しました。史学科にとって、二〇一八年度は大きな節目の一年となりました。

## 教員近況

### 〈中華文明の中心と辺境で〉

平成九年度卒 山本 孝文

(史学科教授 東アジア考古学)

服飾とデザインを求めてアジアの各所に調査に出掛けている。といってもファッション系の副業に従事しているわけでも、アパレル系への転職を考えているわけでも決してない。中国の唐王朝が定めた官僚のユニフォームに付属する飾りと、建築部材や装飾品などにあしらわれた唐草文様の系譜を追い、当時唐王朝と直接・間接の関係を結んだ国と地域を跡付け、その歴史的背景を探っている。特に前者のうち官服の腰帯に金属や石の飾り(腰帯具)を付けて着用者の身分階層を表現するシステムは唐周辺の国々に導入され、その実際の遺物は中国各地をはじめ、日本・朝鮮半島・モンゴル・ロシアなどの遺跡から続々出土している。唐の活動範囲を考えると、ベトナムやカザフスタンなどでも必ず見つかるはずである。

今回、中国西安郊外にある唐の高宗と則天武后の合葬陵である乾陵を十余年ぶりに訪れた。目的は、唐に服属していた(と唐が考えていた)周辺諸民族の人々の姿を実寸でかたどった石像「六十一蕃臣像」の調査である。服装まできわめて写実的に表現されており、

それぞれ少しずつ異なる腰帯具を佩用している。唐の皇帝のもとに参集した諸民族の石像が着用した腰帯具と、実際に各国の遺跡から出土する腰帯具の特徴を比較することで、腰帯具と民族の相関性が見えてくるだろうという目論見である。小雨がぱらつく中、数時間かけて六十一体の石像の腰のあたりをまさぐりながら一つずつ丹念に調査していると、中国人観光客が物珍しそうに声を掛けてくる。蕃臣像を調査する海東の異民族の姿が、彼らの目にはどう映ったであろうか。

この作業には補助資料がある。同じ時代の唐三彩の人物俑(人形)や、唐墓・石窟の壁画に描かれた人物図にも腰帯具が見られる。西安から敦煌へ飛行機で飛び、莫高窟の壁画に描かれた人物図を調査した。数百ある石窟のうち、普段ならば案内人がランダムに選んだ窟に団体について回らなければいけないのだが、観光の閑期であることをいいことに希望する石窟に個人で入れてもらい、じっくり見学させてもらった。メインの仏像をそっこのけに、隅の人物図の腰のあたりばかり懐中電灯を照らして凝視する見学者を、怪訝に思っただかもしれない。

中国王朝と周辺国の関係史を物語る遺物の多くは現在の国境を越えて散らばっているため、実物を見ることを信条とする考古学の資料調査は難儀であり、それらを巡礼する調査の旅もまた終わりが無い。言葉も食べ物も環境も異なる地域に向いて延々同じようなものを見たり測ったり撮影したりしていると、高燥寒冷の地、低湿温暖の地、はては砂漠地帯まで、衣服の機能面を度外視して当時の



写真  
敦煌莫高窟にて

人々が同じような服を着ていたことにふと気付いた。「強国」が発する流行り文化の浸透力は、昔も今もまことに際限と節操がない。その裏に政治や経済が絡んでくるとなおさらである。中国のマクドナルドでハンバーガーとコーラを食しながら、そんなことを考える。

## 史学科の昔と今

### 〈恩師探訪〉

——恒例となりました「恩師探訪」のコーナーでは、平成一一年度から平成一七年度まで、史学科教授として教鞭をとられた佐々木隆爾先生にお話をうかがうことにしました。先生は、日本近現代史をご専門とされ、多くの学生・院生のご指導にあられました。本日は、お忙しい所をありがとうございます。まずは、先生の学生時代についてお聞かせいただけませんか？

(佐々木) 私は一九五四(昭和二九)年四月、京都大学文学部に入学しました。一年生の間は、宇治分校、二年生は吉田分校(旧制三校の校舎)で学びましたが、思い出深いのは三年生から史学科国史学専攻に所属してからです。日本近代史を勉強しようと思っていたのですが、この頃の京大には近代史の専任の先生はいませんでした。そのため先輩に相談したり、指導を受けるほかなかったのですが、鈴木良さんという人がその役目をひきうけてくれました。鈴木さんが音頭を取り、立命館大学の後藤靖先生を囲んで板垣退助監修の『自由党史』の輪読会を行い、友人数人と一緒に読み上げたのです。この会は卒論の指針にもなりましたし、何よりも鈴木さんと終生の親友となる機会となりました。

—— 勉学と友情が固く結びつく、まさに学生時代を象徴するエピソードですね。さて、日大に赴任された際に、先生が日大に対して

持たれた印象はどのようなものでしたか？

(佐々木) 日大に赴任したのは、一九九九(平成一一)年四月一日、東京都立大学を停年退職した翌日でした。四月一日に新任教員に辞令を交付する教授会があり、その前に史学科研究室に来て欲しいという連絡をいただきました。実は、それまでに日大文理学部に来たことがなく、道が不案内だったので、妻の路子(故人になりました)が散歩道にしていたので地理に明るく、大学の正門前まで連れて来てくれました。恐るおそる研究室に入ってみると、予想とは全く異なり、先生方や助手・副手の皆さんが十年の知己のように親しく迎えてくださったのです。これ程強烈な好印象をいただいた機会は、生涯ありませんでした。お蔭で次の日から楽しく通勤できるようになり、自分の家から自転車で十三分の道を、途中の家々の咲かせる美しく珍しい花々を楽しみながら通うようになりました。

——なるほど。史学科のアット・ホームな雰囲気伝わってきますね。ところで、先生の教授生活の中で、印象深い出来事や思い出はありますか？

(佐々木)それは何と言っても私の講義に対する学生諸君の反応です。私は授業の最初に、出席票の裏面に質問や意見・異論反論など何でもよいから自由に書いて欲しいと要請したのですが、あまり期待はしていませんでした。ところが集めた票を見て一驚しました。実に多くの諸君が何かを書いてくれたのです。常に三分の一位の出

席者が、多い時には半数近い諸君が書いてくれたのです。中でもM君という人は、あの小さな出席票に細かい字でギッシリ書いてくれたのです。それは自分の考える「歴史学」というものと先生の話に出て来た歴史学とは違いがあるように思うが、どう考えればよいかといった一般論的なものでしたが、次回からは、私の知らない歴史事実を示したもので、まさに学術的論議がなされたのです。これほど程度の高い学生が日大にいるという事実を知らされ、かつ、それを表現する能力を持っていることを痛感し、以後私は十分に準備をして授業に臨むようになりました。

——先生に日大生をそのようにご評価いただけるとは、同窓生の私も嬉しい限りです。さて、最後に、先生の近況につきまして、お聞かせいただけませんか？

(佐々木)八〇歳で日大での授業とはお別れましたが、社会的活動は今でも幾つかやっています。一番熱心にやっているのは、「世田谷自治問題研究所」で、今年の九月に第二〇回総会を開きましたので、一九年間続けたことになりました。その間、私が代表(筆頭代表理事)とかいろいろ名前がつけられました(今は理事長になりました)を勤めてきました。仕事は「世田谷区政の診療所」の役割を果たすことです。月一回ずつ理事会を開き、毎回副理事長の中村重美さんから区長の言動を中心とした報告を聞き、情勢の分析をしています。

個人の趣味としては、ヴァイオリンを毎日練習し、月一回レッス

ンに通い、年一回、九月に開かれる発表会に出ています。今年の九月一日で私はベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第五番（「春」）の第一楽章を、弦楽四重奏曲（の編曲版の第一ヴァイオリン）として弾きました（第二ヴァイオリン、ピオラ、チェロは先生方）。あとで先生に「美しく弾けた」と大変褒められました。

—— 本日は、先生のご趣味や社会活動についてもお聞きすることができ、楽しかったです。ありがとうございました。

（質問者・文責 高草木邦人）

### 平成二八年度史学科非常勤懇親会にて



### 〈現役学生の声〉

東洋史ゼミナール（加藤直人先生 東・北・中央アジア史）

史学科三年 須長 初風

—— 今回は東洋史の加藤直人先生のゼミナール紹介です。

加藤先生は長く文理学部長としてご苦労され、多忙のなかゼミをご担当されてきました。三年生の須長さんはゼミ長をされているとうかがってますが、加藤先生のゼミの雰囲気はどうですか？

（須長）東洋史前近代ゼミは現在四名と他ゼミと比べて人数が少なく、正直なところ三年生に上がって最初の頃はどのような雰囲気か、ゼミになるのか、先輩とは仲良く出来るのかと私自身、非常にドキドキしていました。

ですが実際に先輩と一緒に授業を受けていくと合計四名という人数だからこそ、一人ひとりとのコミュニケーションを盛んに行うことが出来、今では最初の頃の不安などなくなりましたね。それぞれの研究テーマや資料収集や進路関係の話題に限らず、趣味の話や最近の出来事などを楽しく学んでいます。好きな事を自由に話せる雰囲気があり、ゼミ長として至らない点も多い私をサポートしてくださるゼミ生の皆さんは、心から信頼出来る仲間という感じです。

—— さすがゼミ長の発言、優等生の答えですね（笑）。

—— 肝心の授業内容についてはいかがですか？

（須長）一回の授業につき一名のペースで毎週報告を行っており、

一人にたくさん時間を割いていただけるのは、我々学生にとつてとてもありがたいです。報告後の質疑応答からは新たな疑問点や違った視点からの研究テーマなどを確認することが出来、私自身もこの報告を何度か行っていく中で、初めに設定していた研究テーマとは違った方向にも興味関心が湧き、今後の研究の進め方に取り入れていきたいと考えている一人です。

さらに授業では中国語で書かれた文献の解説も並行して行っており、今後の研究作業にあたって必要となる中国語資料の読み下しに馴れていくことを目標にゼミ生は日々努力しています。

この文献解説にはとても苦勞し、一文字ずつ辞書をひいて意味を調べていく作業では、やはり現代中国語の理解とは違い、一筋縄ではいかない前近代の資料ならではの難しさを実感します。私自身今もまだまだ完璧とは程遠いと感じているのでこれからも一つ一つの作業を怠らずに進めていきたいかぎりです。

——そうですか。外国史ならではの文献史料との格闘よくわかります。その加藤先生の印象はどうですか。ちょっととしたエピソードもあれば教えてください。

(須長) 加藤直人先生といえばやはり学部長のイメージが強く、我々三年生は二年次の基礎実習でも別の先生にご指導をいただいていたため、最初はゼミの雰囲気と同様にどのような先生なのかとても緊張したことを覚えています。

ですがゼミでの授業を重ねる中でゼミ生それぞれの違った時代

やテーマ全てに丁寧に対応してくださり、我々が考えもしなかった視点からの意見を提示してくださる姿からは先生の知識の広さそして偉大さをひしひしと感じます。また授業中であつても生徒の研究に活かせる資料があればすぐに持ってきてくださるなど普段からお忙しいなか、我々のためにご教示してくださり尊敬出来る先生だと強く感じています。

ちょっととしたエピソードですか、そうですね、加藤先生の研究室の資料量には驚きました。以前、報告準備のためにゼミ生で研究室にお邪魔させていただいた際には、椅子をひくのも難しいほどの資料の山にただただ圧倒されました。あの絶妙なバランスを保つ膨大な資料の中から我々の報告にあつた資料を即座に提供してくださる先生の記憶力は真似できないなど感じました。

——須長さんありがとうございました。加藤先生の人柄も伝わる色々なお話でした。卒論にむけて、加藤先生に「ぐらいついて」って下さいね。

(質問者・文責 関 幸彦)

### 近況通信

○日本大学付属中学・高校、大学の非常勤講師などを一八年間(史学研究室に四年間勤務)勤め、その後、大学史編纂室(現本部企画広報部広報課)の常勤嘱託となり二〇年目となりました。非常勤時代は近世史の研究を行い、視野が狭いと言われていましたが、大学

史の仕事に携わるようになってからは、扱う時代・分野が広く、視野が広がった分、まとまったこともできずに過ごしています。

もう数年で定年ですので、また「狭い研究」に戻りたいと考えていますが、浦島太郎状態なので、時代に限らず興味の赴くままに、気ままな研究でもしようかとも思案しているところです。

昭和五二年度卒 小松 修

○佐野日大に勤めて早一四年、日本史を担当しています。夏季教科研修会や説明会などで、恩師の中村先生や加藤先生や、同窓の先生方にお会いできる機会も多く刺激を受けています。教え子が史学科に進学し頑張っているのも嬉しいものです。学生時代は史料と論文に浸かり、行き詰まりながらも研究に没頭できたことが今の自分に繋がっています。大学全入時代を迎え、流されて進学する学生も多い昨今、大学だからこそその醍醐味を話し、一人でも多く史学の道に進んで貰えたらと、教鞭を取っています。

平成一〇年卒 神山 有紀子

○大学院を出てから私は地方銀行に就職致しました。学生時代に学びました知識や教養とは異なる知識を求められるフィールドで過ごしておりますが、常に新しい知識を得られ、また高い専門性が求められる日々を楽しみ過ごしております。

現在、渉外担当として日々法人オーナーや資産家の方々と接しております。今日の金融業界では本来の「預金」「為替」「融資」業務

だけではなく、「M & A」「ビジネスマッチング」「投資信託」「保険業務」などを通じて質の高い総合的金融サービスの提供が求められております。そのため様々な知識を高いレベルで求められるのです。

就職した当初から今日まで、周囲から「なぜ今まで学んだ分野とは異なる分野に踏み込んだのか」とよく聞かれます。ですが、「なぜ」「どうして」と思う気持ちがあるからこそ常に新しい知識を得ていくことができるのだと思っております。その「なぜ」「どうして」と敏感に感じることができるのは、歴史学を通じて得られた想像力と思考力の賜物だと思っています。

是非、在学されている皆様には「自主創造」の精神のもと、積極的に豊かな想像力と物事を深く考え敏感に反応する思考力を歴史学から学び養って頂けたら嬉しく思います。

平成二五年度卒 深川 拓樹

## 平成三〇年度史学科行事紹介

- 四月 三日 ガイダンス開始（四月六日まで）
- 四月 三日 文理学部開講式
- 四月 八日 日本大学入学式（日本武道館）
- 四月 九日 前学期授業開始（七月二十八日まで）
- 六月 三日 関ゼミナール・日本史演習の合同野外授業  
神奈川県・鎌倉市において、関ゼミ・日本史演習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。
- 七月 一五日 文理学部夏季オープンキャンパス  
史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、土屋好古教授による特別授業「高校世界史から大学の歴史学へ」を行いました。
- 七月 二八日 遺跡整備調査（八月九日まで）  
長野県上川村国指定史跡大深山遺跡において、調査協力依頼により、整備調査が行われ、多数の学生が参加しました。
- 八月 二日 夏季休暇開始（九月二日まで）
- 八月 五日 東洋史ゼミナール合同合宿（七日まで）  
日本大学文経井沢研修所において、加藤ゼミ、松重ゼミ、粕谷ゼミの合同合宿が行われ、二六名の学生が参加しました。
- 九月 一日 遺跡発掘調査（九月一〇日まで）  
南中野遺跡において、考古学実地研究の野外実習が行われ、二六名の学生が参加しました。
- 九月 二二日 後学期ガイダンス
- 九月 二四日 後学期授業開始（一月二六日まで）
- 九月 三〇日 文理学部秋季オープンキャンパス  
史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、平野卓治教授による特別授業「歴史と神話・伝承―出雲を中心に」を行いました。
- 一二月 三日 文理学部ホームカミングデー  
史学科では、学術研究発表会（史学部会）を開催しました。  
また、二日から四日までの三日間に文理学部の学園祭（桜麗祭）が開催されました。
- 一二月 九日 関ゼミナール・日本史演習の合同野外授業  
神奈川県・鎌倉市において、関ゼミ・日本史演習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。
- 一二月 二五日 松重ゼミナール海外研修（一二月二九日まで）  
台湾において、松重ゼミの研修旅行が行われ、国立台湾師範大学大学院にて学術交流等が行われ、一名の学生が参加しました。
- 一二月 二五日 冬季休暇開始（一月八日まで）
- 一月 一〇日 卒業論文受付開始（一月一五日まで）
- 一月 三一日 春季休暇開始（三月三一日まで）
- 三月 二五日 卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式



# 平成三〇年度史学科データ一覧

## 史学科専任教員

日本史 中村 順昭 教授（日本古代史）  
 関 幸彦 教授（日本中世史）  
 古川 隆久 教授（日本近現代史）  
 小川 雄 助教（日本近世史）  
 東洋史 加藤 直人 教授（東・北・中央アジア史）  
 松重 充浩 教授（東アジア近現代史）

西洋史 粕谷 元 教授（トルコ近現代史）  
 坂口 明 教授（古代ローマ史）  
 土屋 好古 教授（近代ロシア史）  
 森 ありさ 教授（アイルランド近現代史）

考古学 浜田 晋介 教授（日本考古学）  
 山本 孝文 教授（東アジア考古学）  
 文化財学 平野 卓治 教授（文化財学）

## 史学科研究室スタッフ

堀川 徹 助手 A（日本古代史）  
 山本 興一郎 助手（古代ローマ史）  
 鈴木 麻里 助手・市川 光祐 助手  
 小島 りら 助手・辻 あや子 助手

## 平成三〇年度史学科非常勤講師数

五一名(大学院を含む)

## 平成三〇年度史学科開講科目数

総合教育科目 半期六コマ  
 学科専門科目 半期一四八コマ  
 教職課程 半期二コマ  
 学芸員課程 半期二〇コマ  
 通年二コマ(集中含)

## 平成三〇年度史学科開講科目一覧

自主創造の基礎一（旧 歴史学入門ゼミナール）  
 史学概論（旧 史学概論一）  
 自主創造の基礎二（旧 史学概論二）  
 日本史入門  
 東洋史入門  
 西洋史入門  
 考古学入門  
 日本史概説一・二  
 東洋史概説一・二  
 西洋史概説一・二  
 日本考古学概説一・二  
 外国考古学概説一・二  
 日本史基礎実習一・二  
 東洋史基礎実習一・二  
 西洋史基礎実習一・二  
 考古学基礎実習一・二  
 日本史研究実習一・二  
 東洋史研究実習一・二  
 西洋史研究実習一・二  
 考古学研究実習一・二

日本史ゼミナール一・二・三・四  
 東洋史ゼミナール一・二・三・四  
 西洋史ゼミナール一・二・三・四  
 考古学ゼミナール一・二・三・四  
 文化財ゼミナール一・二・三・四  
 日本史特講一・二・三・四・五・六・七・八  
 東洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八  
 西洋史特講一・二・三・四・五・六・七・八  
 考古学特講一・二・三・四・五・六・七・八  
 日本史料研究一・二・三・四  
 古文書・古記録学一・二・三・四  
 東洋史文献研究一・二  
 西洋史料研究三・四  
 考古学方法論一・二・三・四  
 考古学実地研究一・二  
 遺跡解題一・二  
 歴史民俗学一・二  
 文化財学一・二

## 平成三〇年度史学科学生在籍者数

学部生 一年生 一三八名、二年生 一五八名  
 三年生 一六五名、四年生 一四三名  
 合計 六〇四名  
 大学院生(M) 一年生 七名、二年生 一六名  
 合計 二三名  
 大学院生(D) 二年生 〇名、三年生 二名、  
 合計 二名

## 平成二九年度卒業論文題目

現在の史学科学生はどのような興味・関心を持っているのか、平成二九年度卒業生の卒業論文の題目を一部ご紹介いたします。(順不同)

トルコ料理にみる食文化の伝播と融合

カロリング家のアウストラシア内での台頭

戦国期三好氏の宗教政策―畿内での活動を中心に―

藤原北家台頭の過程―冬嗣を中心に―

地方寺院の変遷について―所蔵文化財との関連をめぐって

第二次世界大戦期のアメリカプロパガンダ映画

内外市場から見た英国におけるロイター通信社

常陸の装飾横穴墓群から見る九州の装飾横穴墓群との繋がり

大正、昭和初期の朝日新聞と毎日新聞

千葉氏の本佐倉城移転について

極東大会開催をめぐる東アジアにおける協調と挫折

一八〜一九世紀ドイツにおけるユダヤ人の法的解放とその影響

甕被葬の実態―縄文時代中期 東京湾東岸域における事例―

スターリンのロシア正教会に対する政策と正教会

弥生時代における小銅鐸と銅鐸の資料的差異

一九六四年東京オリンピックの再評価

ヴィシー政権期におけるユダヤ人―「ユダヤ人」の日記を分析して―

古代日本における女帝の誕生について

オスマン帝国のユダヤ教徒コミュニティの生成と変容

フイリップブルボン期におけるブリュッセルの裁判事例

中世期における怨霊―『平家物語』と『太平記』を比較して―

絵画資料からみる弥生時代の文化の様相

ガーナ独立の背景とその影響

日本国憲法九条の意義と改正論の歴史

甕棺出土品からみる弥生時代の社会構造

大塩平八郎の人物像と大塩の乱の背景

北関東の遺跡からみる縄文時代―古墳時代の災害とその影響について

中世日本における東京都周辺の遺跡から出土する銭貨に見る年代推定

紙幣―中世の人物たちの活躍―

第二次世界大戦期におけるフィンソ関係―フィンランド側からの検討

ムデハルから見るアンダルスの文化融合

西上総地域の古墳編年の再検討

中国における法制の発展と展開

石清水八幡宮の繁栄―王朝体制を中心に

千葉県における自由民権運動の展開―明治一〇年代を中心に―

舟塚山古墳を中心とした霞ヶ浦の古墳について。

古ゲルマンにおける諸身分とジツペ

会津戦争における籠城

すしという食べものを知る

ローマ帝国のキリスト教徒大迫害―ディオクレティアヌス帝を中心に―

昭和戦中期の革新官僚 迫水久常



**写真**

**日本大学文理学部本館**



**写真**

**日本大学文理学部本館1階ラーニング・コモンズ**

## 編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。

URLは下記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数制限は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へご連絡下さい。なお、お電話でのご依頼は、事務局体制の事情により、恐れ入りますがご遠慮いただきたく存じます。

## 〈編集後記〉

『会報』も四号となりました。暗中模索の中で始まった編集作業ですが、各コーナーも固定的になり、だいぶ落ち着いてきました。

また、同窓生の皆様におかれては、ぜひ近況通信を募集しています。ぜひご投稿を。



平成30年度 日本大学文理学部史学科同窓会

2018年3月3日 於：アルカディア市ヶ谷

史学科同窓会ホームページURL

<http://www.nu-hist-d.jp>